



「スプートニクの恋人」の記憶

purita

「スプートニクの恋人」の記憶

「スプートニクの恋人」。何だか謎めいた、とても素敵なタイトルではないだろうか。1999年に出版された、村上春樹氏の小説である。ちなみに「スプートニク」とは1950年代に旧ソ連が打ち上げた世界初の人工衛星の名前だ。

小説の内容について、最初に少しだけふれておこう。物語の語り手であり男性である「ぼく」は「すみれ」という名の女性に恋をしている。けれどもふたりの間に男女の関係はなく、作中の言葉を借りれば「微妙な友情のようなもの」で結ばれている。ある日すみれは、あろうことか17歳も年上の既婚女性である「ミュウ」に一目惚れをしてしまう。そして彼女に雇われて働き始めるのだが、旅行先のギリシャの島で、すみれは突如として姿を消してしまう…。

この小説のテーマは、恋愛の悲喜こもごもを描くことのみには留まらない。今日にしている現実の世界と、普段は目にするのでできない非現実の世界。その二つの対比を手がかりに、人間の孤独とその存在の不確かさを描き出し、存在の意味を問いかけている。それは作者の他の作品でも繰り返し語られるテーマである。

前置きが長くなってしまった。自分とこの作品との出会いについて語ろう。それはすみれの年齢とたまたま同じ22歳のときだった。書店でこの本を手にとったとき、タイトルと物語の冒頭部分に強烈な印象を受けたことを覚えている。登場人物の一举一動に共感を覚えたり、はらはらとしたりしながら、最初から最後まで何度となく読み込んだ。

当時の私は終わりの見えている年上の男性との交際に思い悩み、必要以上に（というか無駄に）一悶々とした日々を送っていた。単純に言うと、片思いだった。

「スプートニクの恋人」の登場人物に両思いの人って出て来ないのである。そこが当時の「暗く陰鬱」としか言いようのなかった私のツボにどうやらはまっていたようだ。

村上春樹の小説は主に20代に読み漁ったが、今でも新しい本が出る度にそわそわする。そして件の男性は「超」がつくほどの文系で、同じように村上氏の小説が好きでよく読んでいたので、二人で作品についてあれこれ話すこともあった。

本との出会いが20代前半の多感な時期だったことと、上述の文学青年との短い恋愛（のようなもの）の期間に重なっていたために、この作品を読むたびに当時の記憶が呼び起こされる。そういう意味で「スプートニクの恋人」は私にとって特別な、少々やっかいな作品となった。

結局2年ほどの交際の末、彼との関係は解消され、立ち上がる気力も持てないくらいに落ち込んだ。その頃自分は八方塞がり、都会暮らしにうまく馴染めず、納得のいく職業と職場を見つけることもできず、社会に自分の居場所を見つけることが全く出来なかった。精神的に追いつめられ、夜中に目が覚めて自分がいまだここにいるのかわからなくなることもあった。

「ぼく」には性欲の行き場はあるが（すみれ以外に定期的に出会う女の人がいる。うらやましいことに）、恋する心の行き場がない。その所在なさが、読んでいる自分にとって逆に救いだった。

この本が私に与えたもののひとつは、恋愛についての一定の理解というかあきらめである。それも前向きな。溺れている人が水面下より空を見上げ、おぼろげにその輪郭を認めてほっとする、一艘の舟みたいだった。

「スプートニクの恋人」は、私の思うようにいかない人生において、タグボートのような役割を果たしてくれたと思う。自分が目にしていない現実と心との、あやういバランス。それをどうにか保つのに、この本は多めに役立ってくれた。自分という存在が根本から揺らいでいる状態を正確に表現し、目に見えないことを見えるようにしてくれた。

失敗は人を強くする。自分は20代を通して大なり小なり日常茶飯事のように失恋を重ね、職を転々とし、解雇までされた。けれども度重なる失恋は私に人間的な成長を強く迫り、いい男（よりましな男？）を見抜く力を与え、職場からの解雇はとっとと人生の道を変えていく臨機応変さを否応無しに身につけさせた。

うんそうだ、きっと一番影響を受けたのは、作品の底に流れるある種の力強い「ストイックさ」ではないだろうか。他の作品にも感じられるこの「ストイックさ」は、情緒的に不安定で自信というもののかけらも持ち合わせていなかった自分の心に、ダイレクトに響いてきた。それは静かにひとつの模範を示し続け、人生に何が起ころうとも（失恋や解雇や家族の死や、結婚や子供の誕生など）淡々と目の前にある出来事を受け入れ、それを乗り越えていく強さを授けてくれたように思う。

もう今となっては、過去の恋愛も仕事の失敗も、本当にどうでもいい。そんなものはスプートニクの人工衛星みたいに、心のどこかに静かに飛ばしておけばいいのである。